



うまくいくことだけが目標じゃない

園長 野中 泉

2月に参加させてもらったいちご組の最後の懇談会。今年をふりかえろうというお題で、口火を切ってくれたひとりのお母さん。「3人の子育てで余裕がなくなって、ずっとイライラしてて。トイレトレーニング中の真ん中の娘がおもらしをただけなのに、ものすごい剣幕で怒鳴ってしまったり、一年生の上の娘に本当に酷い言葉を投げつけたり…。こんなんじゃ、私は今話題の毒親なんじゃないかって、もう怖くなって…。」堪えきれず、泣き出す彼女に「一緒に、全くと一緒に。私のことみたい…」ともらい泣きする隣のお母さん。それを見守るその場の全員が大きく頷きながらもらい泣きです。

生まれたときはあんなにうれしかったのに、「夜泣きがひどい」、「離乳食を食べてくれない」「なんでもイヤイヤいう」と、子育ての壁はあっという間にやってきます。その後も「歩くのが遅い」「言葉が出ない」「友だちを噛む、ひっかく」と続いて、その度に、愛情不足なんだろうか、育て方が悪いのか、親として自分はダメなんじゃないかと、自分を責めたくくなります。もう少し大きくなると、学校の成績にも一喜一憂するし、我が子が運動ができなくても落ち込むし、友だち関係でつまづいたり、ましてや学校に行きたくないなんて言われたら、ほんとうに自分の子育てに自信をなくしてしまう。親としての挫折は、思っていた以上に次々にやってくるのです。

アトムでも、毎日何人ものお母さんからそんな悩みを聞いてきましたし、実をいうと、私自身もそんな親のひとりでした。今でこそ、そんなことあるわけないよなと思いますが、若い頃は子どもというのは大人が愛情をたっぷり注いで育てさえすれば、すすくと良い子に育つと思込んでいたので、子どもにうまくいかないことがある度に、「自分のせいかな」「私の愛情のかけ方が間違っているのかな」とひたすら落ち込みました。

でも、立ち止まって、冷静によく考えてみれば、変な話だと思います。そもそも人が育つということにおいて「うまくいく」って何よ、と思うのです。離乳食をちゃんと食べてくれることか、友だちとトラブルがないことか、勉強ができることか。園や学校に行くことを嫌がらないことか。もっと言えば、人生は「うまくいかない」日があっちゃんかんのかいとも思います。子育ても、人が生きるということもそんな単純なものではないはずですよ。

2月の終わりに久しぶりに保育に入る機会があり、みかん組の子どもたちと遊びました。「どろぼうとけいさつ」という昔からおなじみの遊びをしていたのですが、最初の1回めは『どろぼう』と『けいさつ』の数の比率が悪くあつという間に泥棒が捕まってしまう。「こんなん、つまらない」とひとりのどろぼうの子が口をとがらせます。続けて「けいさついっぱいいて、ずるい」と口々に文句を言うどろぼうたち。でも、そのうち「けいさつが多すぎ」「けいさつは、どろぼうをタッチするだけじゃなくて牢屋まで運ばないとだめなんやで」「タッチしてもらわなくても、脱獄してもいいことにしたほうがいい」と文句は話し合いに変わっていきます。みんなで納得してルール変更。再開しますが、今度はどろぼうに有利すぎて、全然終わりがきません。すると、また誰かが「待って」と声をあげ集まる子どもたち。今度は「どろぼうずるい」と憤慨するけいさつの子たち。「じゃあ、俺は足早いからけいさつになってあげようか？」と言う子や「わかった！けいさつも得するルールをつくればいいんじゃない？捕まったどろぼうの中で誰でもいいからひとりけいさつにしたいとかさ」と大人顔負けの提案をする子などいて、またまたルール変更がされていきます。私はその様子にすっかり感心してしまいました。

私たち大人は、ついつい一足飛びに「うまくいく」ことばかりを目標にしがちです。とくに、これから小学校にあがる5歳児を持つ親たちは尚更でしょう。「学校で困らないように」と必死になる親たちの気持ちもわからないではありません。でも、アトムの子どもたちは、そんなふうには思っていない。うまくいかなかったら、立ち止まり、話し合いながら知恵を出し合っていけば大丈夫だと、ちゃんと知っているのです。

みかん組の子どもたち、そして、お父さん、お母さん。卒園おめでとう！